



「脚下照顧」

人みな師なり のコーナー

『国家の品格と経営の神様とフットサルの関係』

先日こんな現場がのつよした。切のハ物ッる工場さんだったので朝から安全教育を受けたいのですが、工場さんと元請さんの安全教育がダブルであったらしく、待ち時間なども含めて教育が終了したのがお昼。そこから昼食を済ませ、現場に行ってKY、安全対策、作業段取りを教育通りに実施したら、作業開始が夕方4時ごろになってしまい、結局夜遅くまでの作業を集中力の低下した中で実施せざるを得なかったということでした。

この作業報告を聞いたとき、『何かがおかしいよなー』と思わずつぶやいてしまいました。机の上で協議しただけの安全対策案は、まったく末端の作業者の肉体的な負荷や精神的負荷を考慮に入れていない頭の中の合理性のみで考えられたものが多く、確かにそれを確実に実行すれば事故が防げるかもしれないが、実際の現場(実際の現場=頭の中の理想-肉体の苦痛-精神の苦痛-コストの制約-時間の制約-α)

ではあまり有効ではなく、事務処理の一つも余分に増えたと作業者に感じさせて終わりになってしまふことが正直言って多々あると思います。よく現場で『これ以上安全対策を追加するなら、真夏の一番暑い時に自分たちと一緒に汗を流してヒューヒュー言いながら働いてみて、その上で自分の考え出した安全対策が全部完璧に実施できるかどうか試してみたらどうか！』という愚痴を洩らしてしまうのですが、そんな自分とて立場が変わって管理者として現場に見回りに行った時の第一声が『安全帯やってる?』であったりする訳で、これを正しい文章に直すと『パトロールが回ってきてあなたが指摘を受けると、元請さんが呼び出されて私の立場がなくなり非常に困るので、安全帯をやってますか?』であり、本来の『あなたの命が危険にさらされていて、あなたとあなたの家族に不都合があつてはいけなくて安全帯やってますか?』という気持ちで見回りが出来ない情けない自分がいることも自覚しております。

まるでアメリカが行けと言うからイラクに行っているだけの日本の自衛隊のようで、何か大切な感情が取り残されて建前だけが一人歩きしている感じがして悲しいですね。

『国家の品格』という本がベストセラーになっています。全国民の命をかけて戦った戦争に敗れて、もう国のことはいい、これからは個人の幸せだけを追いかければいいと大多数の人達が感じ、アメリカの掲げる『自由平等』『合理主義』を推し進め世界第2位の経済大国にまで発展してきたが、なぜか人の心は戦前よりも殺伐として『金で買えない物はない』と真顔で答える大人と『何で人を殺してはいけないの?』と真顔で質問する子供達を作ってしまった。この殺伐の原因は我々日本人が個人主義、合理主義を優先してお互いを思いやる情緒を置き去りにしてきたことと、金儲けを優先して、卑怯なことはしないという日本人が本来持っていた武士道精神をないがしろにしてきたことをこの本の作者は切々と語っています。

職場は違っても多くの日本人がなんとなく『何かがおかしい』という感情を抱えているがゆえにベストセラーになったのではないかと思います。

そんなことを漠然と感じていた時にふとTVでとてもタイムリーな感動的な逸話を知りました。話は今から35年程前に遡りますが、あの大阪万博で、ある大企業が法隆寺の夢殿を模したパビリオンを建設し、これが大評判になって連日長蛇の列となつたのですが、この長蛇の列に真夏の一番暑い時間帯を選んで一般客と一緒に2時間並び、パビリオンにたどり着くや否や①もっとスムーズにパビリオンに入れるような新しい誘導方法を考えること②日よけになるように所々に大きな日傘を設置すること③紙の帽子を作って並んでいるお客さん全てに配ること、の3つの指示を出した経営者がいたというのです。

皆さんは誰だと思いませんか?これがかの有名な『商売の神様』と言われている松下幸之助翁です。当時76歳!!すごいと思いませんか?この時他社の反応は『さすが松下さんは商売がうまい。万博の会場までも帽子を使って宣伝しようとしている』だったらしいのですが、明らかに人間としての『品格』が違いますよね。

我々テックア技研も3歩進んで2歩下がるような歩みではありますが、泥の中から蓮の花を咲かせるような会社になりたいと思っています。話は変わりますがテックアでフットサルのチームを結成しました!

チーム名はポルトガル語?で『BONJITETE』です。日本語読みは『凡事徹底』です。

『こころある道』をぼちぼちと歩みたいと言う気持ちがこもっております。

ふるってご参加ください!!

感謝! 羽原篤史

